

[研究ノート]

安政5年長州藩におけるコレラ流行

土井 浩

山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

Cholera Epidemic in the Choshu domain, 1858

H i r o s h i D O I

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

Abstract

In spite of vaccination on a large scale, COVID-19 has continued spreading all over the world. In the history of Japan many epidemics such as Smallpox and Tuberculosis have broken out and taken many people's lives. In this study, I research on the epidemic outbreak of Cholera which was raging throughout the Choshu domain in 1858. It happened after Japan was forced to open the country to the Western countries, and Cholera spread almost all over Japan from the crew of an American ship in Nagasaki port who was infected in China. The Cholera epidemic was one of the reasons for the expulsion of foreigners from Japan.

It was an age when neither vaccines, treatments, nor even original pathogens were known. How did the statesmen and people in the Choshu domain confront this terrible and unknown infectious disease? What did they leave as lessons for the future? In this study, I inquire into the following historical sources: One is the Ura Dairy written by Yukie Ura, an upper samurai, the Lord of Atsuki (a part of now Yanai) and one of the top political leaders of the Choshu domain. The other is the Furuya Douan Nichijou (Dairy) written by a doctor and educator living in a small village north of Shimonoseki at that time. The descriptions of the Cholera epidemic in the end of the Edo era give us useful hints about dealing with the challenges we face in our Reiwa period.

Keywords: the Choshu domain in 1858, Cholera epidemic, the Ura dairy, the Furuya Douan Nichijou (diary),

Developing new ideas based on studies of the past and learning from the past

キーワード: 安政5年長州藩、コレラ流行、「浦日記」、「古谷道庵日乗」、温故知新

1. はじめに

2019年末頃から感染が拡大し始めた新型コロナウイルス(COVID-19)は、その後、全世界を巻き込む未曾有のパンデミックへと発展した。今日、ワクチン接種や治療薬の開発が進展しつつあるものの、感染力の強い変異株の登場などもあり、未だ感染収束の目途は立っていない。

ちなみに、人類がパンデミックに直面したのは、これが初めてではない。過去、天然痘、ペスト、マラリア、梅毒、結核、コレラ、インフルエンザといったウイルスや細菌に由来する多くの世界的規模の感染症が繰り返し人類を襲った¹⁾。

日本史上においても、数多の感染症が猛威を振るい、多くの人命を奪い社会を混乱に陥れた²⁾。そのなかで、本稿では、幕末期の安政5年(1858)に、海外から流入し日本全土に感染が拡大、長州藩でも猖獗を極めたコレラを取り上げる³⁾。

もっとも、ワクチンや治療薬どころか、コレラ菌という病原体さえも知られていなかったのがこの時代である⁴⁾。当時の為政者や民衆は、どのようにしてこの恐るべき未知の感染症に立ち向かっていったのであろうか、また後世に何を教訓として残したのであろうか。歴史学が持つ「故きを温ねて新しきを知る」という視点に立ち、本主題を考察してみたい。

2. 安政5年におけるコレラ流行について

コレラは、コレラ菌(がつくりだす毒素)によっておこる急性の消化器系感染症である。患者が吐瀉したものや下痢便、コレラ菌に汚染された飲食物などの経口摂取により感染する。潜伏期はおよそ1~3日で、定型な場合には突然激しい下痢、嘔吐が始まる。下痢は水様で、米のとぎ汁のようになり、悪化すると1日で10リットル以上の量になることもある。体内の水分が急速に失われるため、血液は濃くなり、循環障害をおこし、目はくぼみ、特有の顔つき(コレラ顔貌)になり、手足はしなびて(洗濯婦の手)、体温が下がる。早期に輸液などの適切な治療が行われない場合は、虚脱状態となり半数以上が死に至るという恐ろしい感染症である⁵⁾。

コレラは、元来、インドのガンジス川流域とくに下ベンガル地域に盤踞していた風土病的性格をもった感染症であった。それが19世紀、近代文明の進歩、とりわけ交通の活発化とともに、国際交流の波に乗り他の地域にも広まった⁶⁾。その感染拡大は、インドを植民地支配したイギリスの帝国主義的海外発展とも関係する。

日本が最初にコレラに見舞われたのは文政5年(1822)

であった。インドのベンガル地方から世界に広まったコレラは、日本の西南に上陸し、中国・近畿に感染が拡大していった。さらに、伊勢を経て、東海道の沼津あたりまで感染が拡大したと言われる⁷⁾。

そして、この36年後、この第一次流行をはるかに上回るコレラの大流行があった。これこそ、本稿が研究の対象とする安政5年に起こった第二次流行である。それは、この年5月、長崎へ入港したアメリカ艦ミシシッピー号の乗組員が、中国の上海でコレラに感染しており、それによってコレラ菌が日本に持ち込まれたとされる⁸⁾。病勢は激甚を極め、九州・四国から大坂・京都・江戸から東北にまで及び、ことに江戸は死者3万人前後ともいわれその惨状は目を覆うものがあった⁹⁾。その蔓延は全国的なものであり、病勢の迅速性と致死率の高さ、病因の不透明性などの理由により深刻な社会不安を生んだ。また、それは、外国人によって持ちこまれたことから、彼らに対する憎悪・敵視を助長し、外国人を排撃する攘夷運動が高揚する一因ともなった。

以後も、コレラは繰り返し日本を襲う。安政6年(1859)の第三次流行、文久2年(1862)の第四次流行、そして明治以降も繰り返しコレラは流行した。そして、その都度、長州藩・山口県内でもコレラは蔓延した¹⁰⁾。しかし、その状況については紙幅の関係もあり、後日の論考に委ねたいと思う。

3. 長州藩内におけるコレラの流行とその対策

日米修好通商条約が締結され日本が本格的に開国した安政5年、日本全土でコレラが感染拡大した。そして、長州藩内でもコレラは大流行した。その状況について、次の2つの史料を参考にして、検証していくこととする。

(1)「浦日記」48巻(安政5年「官記」)

「浦日記」¹¹⁾は、阿月(現柳井市)の給領主であり、幕末期、当役・当職・加判役などの藩政の要職を歴任した寄組士・浦敷負元襄(1795~1870)が、およそ45年間にわたって書き記した全62冊に及ぶ日記である。それは、中央や藩の政局のみならず、社会的な諸事件や地域の動向、さらには民衆の行動や意識にまで及んでおり、幕末期長州藩における政治的・社会的状況を明らかにする上で極めて貴重な史料であるといえる。

本研究が対象とする安政5年に流行したコレラ感染の状況が記載されているのは、「浦日記」48巻である。ここには、同年8月から10月にかけて、萩城下をはじめとして諸郡にまで長州藩全体にコレラが流行した様子が、感染

による死者数とともに克明に記されている。ちなみに、「浦日記」には、コレラは「流行病」の名称で登場する。

この日記にコレラ関連の記事が初めて登場するのは、8月16日条である¹²⁾。

当節流行病盛ニ付、左之通御窺相成候事

当節流行病相煩候者余分有之、至て御氣遣被遊候付、救急之療治申出候ハ、御施薬をも可被仰付段被仰出候処、於御医師中もいまた適当之療法存付無之段申出、難被捨置候付思召旨有之、左之通沙汰可被仰付哉

御手当方

右当節流行病有之、御医師中より救急之良法未存付無之段申出、難被捨置候付、空気が発散於西ノ浜空砲打揚、朝夕五発宛打方可被仰付との御事

練兵場

見合中

右同断於練兵場同断、稽古人数申段、打方之義遂心遣候様被仰付候事

中麻原備前守

右流行病為消除、於春日社二夜三日之間御祈禱執行被仰付候事

青山上総介

右流行(病脱カ)為消除、於椿社同断

右之通可被仰付哉

但、満散当日市中神輿行幸被仰付候段、備前守・上総介兩人え申授、御祈禱料之義ハ前々之趣を以銀拾枚神納被仰付可然哉、猶又諸郡在々ニ至迄、於于下村々氏神ニて御祈禱執行神輿行幸等之義相願候ハ、差免候様、地方え沙汰可仕候

この条文からわかることは、コレラに対して、藩政府が医学的に有効な処置が全くとれなかったことである。「於御医師中もいまた適当之療法存付無之」「御医師中より救急之良法未存付無之」の記述からそれがわかる。なんといっても、まだコレラ菌の存在さえも知られていなかった時代である。そのため、コレラは「邪気」とみなされ、この原因不明の感染症に対する施策として藩政府が実施したことはといえば、病氣退散を願い、「邪気除け」として海岸や練兵場で空砲を発射したり、萩や諸郡村々の神社で祈禱を行うくらいであった。ちなみに、こうした非科学的・宗教的な取組は、藩が実施するコレラ対策としてこの後も継続して行われていく。

また、藩政府から萩城下・諸郡における死者数を届け出ることが命ぜられた¹³⁾ことにより、「浦日記」にも8月27

日条からは、コレラによる死者数が連日詳細に記されるようになる。当時の為政者にとって、またそれは民衆にとっても、日々増加していく感染死者数は何よりも必要かつ切実な「知りたい情報」であった。ちなみに、天災や感染症などの災厄に見舞われた時の犠牲者数などを正確に記録に留めておくことは、前近代の時代においても非常に大切な取組であった。こうした統計は、同時代とともに、先例を参考にして危機対応を考え対策を講じる後世の人々にとって、有益な参考資料になるからである。

8月29日には、藩主毛利敬親もコレラに感染した。敬親は幸い軽症でありほどなくして回復したが、その時の模様が次のように記述されている¹⁴⁾。

殿様昨夕方より少々御吐瀉被為在、夜中え掛候て七返計御通有之、右ニ付御放血申上候処、至極被遊御相応、御吐之気味も御折合御熱氣も発し、今朝ハ太分被遊御折合、只今之御様子ニてハ御案思も有之間敷段、青木周弼より致承知候事

敬親はこの日の夕方から、吐瀉や下痢の症状が見られた。しかし、病状は軽く、侍医であった蘭方医の青木周弼が阿芙蓉(阿片)の内服や刺絡を施すなどの処置をとった¹⁵⁾ことにより、翌朝には回復したと記されている。8月晦日条にも、この夜、敬親が安眠し快癒したことが記される¹⁶⁾。

なお、この時代、コレラに対して、漢方医はまったく手も足も出なかった。唯一、コレラに対処できたのは青木のような蘭方医であった。8月29日条には、藩のコレラ対策として、青木が蘭医書の中から必要箇所を翻訳して作成したコレラに対する予防法を記した板本が、藩の医学所である好生館¹⁷⁾から提出されたことが記される¹⁸⁾(写真1)。

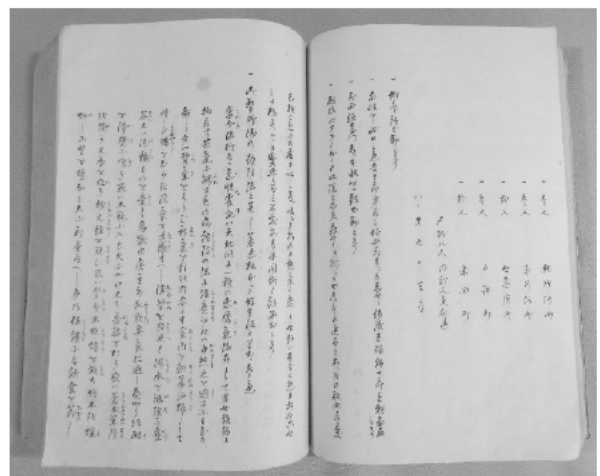


写真1 コレラの予防法(「浦日記」)

このころ 当今流行する急性霍乱ハ、天地間に一種の悪厲気 流布して、男女強弱に拘らず其氣に触るもの、病預

防の法に注意ゆれハ、自然之を避るにも至るべし、
 第一鬱気をはらし新氣を引を肝要とす、室内を朝暮
 酒掃して時々戸牖をひらき風氣を透徹すへし、溝渠
 を疎通て濁水を滌除き、塵芥又ハ汚穢ものを棄て、
 鳥獸虫魚其外死敗臭氣に近くべからず、醋を障壁に
 嘔き或ハ土瓶に入れ火にかけ、又は香鑪をたき或ハ
 蒼朮薫陸を焼き、又香を挂き煙火線を玩び、或ハ野
 外に炮熗を放ち竹木を爆灼し山野を焼など大に利
 益有へし、身の保護には飲食を節し油膩ものを禁
 し、腐蝕たるものは一切食へからず、豪飲飽食は愈
 忌む所也、時々郊野閑闊たる地に逍遙し或ハ新汲
 の水にて身体を拭ふハ、預防の一助なるへし、日中
 の炎熱に操作したる後、俄に冷氣に触れ或ハ夜間
 晏臥し、或ハ縦に納涼み或ハ戸外に露臥する等は
 愈禁すへし、釣漁等にてひさしく身体を冷し、汗或
 ハ水に濡れたる衣服、或ハ汗垢に染たるものを着す
 へからず、居所も務て卑湿を避けて高燥に居へし、
 清水少許を飲み、或ハ大麦煎汁に橙枸櫞の酢を加
 へ砂糖を和せ冷飲するもよろし

これには、感染予防策として、次の様々な取組が記され
 ている。

- ① 風通しをよくし室内の換気に努めること
- ② 溝掃除により溜水を取り除き、ゴミや汚れ物を除去
 すること
- ③ 酢や香などを用いて消毒に努め、また山焼きなどを行
 うこと
- ④ 腐ったものを食せず、また暴飲暴食を慎むこと
- ⑤ 新鮮な水で体を清潔にし、散歩などの運動をすること
- ⑥ 炎暑の後で急な冷氣にあたり、夜更かしや戸外

での転寝はしないこと

- ⑦ 衣服や住居の湿気や汚れを除去すること
- ⑧ 清水や、酢や砂糖を混ぜた麦茶を飲むなど、水分補
 給に努めること

コレラは、コレラ菌に感染した飲食物や排せつ物が経口
 により人体に入り、また他者へと感染が広まっていく。この
 板本には、コレラ対策としてなによりも大切な衛生・消毒の
 重要性が記されている。ワクチンや治療薬がない時代にお
 けるコレラ対策としては、個人の衛生環境とともに公衆衛生
 の改善こそが、最も大切な喫緊の感染予防対策であった。
 また、食事や運動などによる健康保持や体力増進、さらには
 生活様式の改善なども記されていることが見てとれる。

さらに、不幸にしてコレラに感染した場合、その効用は
 別にして、応急処置の方法が記されている¹⁹⁾。

若此病に感り急率に吐瀉おこりて医治を俟つ間に、
 毛布或ハ粗布或ハ空手にても力を極めて手足を摩擦
 り、或ハ白芥子の末を微温湯に入れ腰脚をだんじ、
 但頭脳胸心窩ハ冷水を手巾に浸し罨貼る等は、備急
 の一大良法と云へし

- ① 毛布・布・素手による手足の入念なマッサージ
- ② 白芥子を温湯に入れて足腰を温めること。ただし、
 頭部や胸部は冷たい手拭いで冷やすこと

猛威を振るったコレラがようやく収束し始めたのは、9
 月末であった。それとともに「浦日記」からもコレラ関連記
 事が少なくなっていく。こうして、10月29日、藩政府は、コ
 レラ死者の最終集計を行った²⁰⁾。それによると、萩城下の
 死者数は342人、回復者408人、一方、諸郡では1598人(男
 1013人、女583人、僧侶2人)にのぼった(表1)。

表1 安政5年長州藩内におけるコレラ死者数

宰判名	男	女	僧侶	死去	宰判名	男	女	僧侶	死去
萩町				342	山口(町方)	22	12		34
当島	168	101		269	三田尻(地方)	75	58		133
浜崎	60	46		106	宮市町	11	7		18
奥阿武	169	120		289	三田尻町	3	2		5
前大津	106	60		166	徳地	28	21		49
先大津	34	17		51	熊毛	26	7		33
美祢	12	5		17	上関	17	2		19
吉田	30	4		34	都濃	40	15		55
伊崎	14	20		34	船木	63	35	1	99
小郡	67	26	1	94	山代	0	0		0
山口	27	16		43	大島	41	9		50

※上表は、長州本藩のみの統計表で、岩国領や長府・徳山・清末の3支藩は含まれない。
 ※宰判とは、江戸時代長州本藩の行政区分の名称のことである。

この表からは、コレラが、藩都萩を中心に日本海沿岸地域で流行したこと、また、男性は女性の2倍の死者が出た(当時は女性よりも男性の人流が多かったことが影響したと思われる)ことがわかる。なお、山代宰判(県東部本郷や広瀬周辺の地域)の感染死者数0が目目されるが、人口希薄地域であったことが感染防止に寄与したものと史料される。

(2)「^{ふるや どうあんにちじょう}古谷道庵日乗」第56秋部(安政5年7~9月 日聞雑記)及び第57冬部(安政5年10~12月 日記)

浦敷負が藩を代表するエリートであるとするならば、古谷道庵(1818~1878)は民衆を代表する人物であるといえよう。

道庵は、長州藩支藩の長府藩領豊浦郡宇賀本郷(現下関市)において、医療活動を行うとともに、塾を開いて子弟の教育にあたった。その道庵が、42年の長きにわたって休みなく書き継いだ全115冊におよぶ日記が「古谷道庵日乗」²¹⁾であった。それには、医療、教育、天候や農業、物価変動、さらに幕末の時世も反映して対外的危機の様相や慶応2年(1866)における幕長戦争などの記事も記されている。

なかでも、道庵は医師であったため、日常の医療活動が詳細に書き記されている。そのなかに、コレラ関係の記事が散見されるのである。その「日乗」には、コレラは「虎狼痢」と記されている。

安政5年におけるコレラに係る記事は、8月16日条から登場してくる²²⁾。

初、石川良平・漁夫勘左、話曰、崎陽・平戸之地、近日虎狼痢大伝染、一日人死二百或三百、下之関亦人死夥矣。是夷人、流毒于海中、魚類、食之而伝人云々。

ここには、長崎・平戸でコレラが蔓延している状況が記されている。また下関にも多くの死者が出ていることが記される。この記事で問題になるのは、外国人が「毒を海中に流し、その毒魚を人が食して感染した」という記述である。無論これは根も葉もないデマであるが、大災害やパンデミックなどの異常時にこのようなデマや誹謗中傷が流布するのは、古今東西を問わない現象である。安政5年、コレラは外国人によって海外から流入したが、この記事に見られるように、「コレラは外国人の所業」とみなされたことも、外国人を敵視し排撃する攘夷思想や運動の一因となった²³⁾。

翌17日にも、コレラの流行が記される²⁴⁾。

訪上総氏、湯玉・二見漁夫、多在五島・平戸、以虎狼痢之風説、其妻等、請神符在焉。黄昏、帰家浴兵吉氏。市太、自関婦曰、関人死每五七十人云々。聞之者

皆怖。

これには、五島・平戸にいる漁師の妻たちが、神符を求めていること、そして下関でコレラが大流行していることが記されている。

18日には、道庵は診療により、地元の二見にコレラ患者があらわれたことを知る²⁵⁾(写真2)。

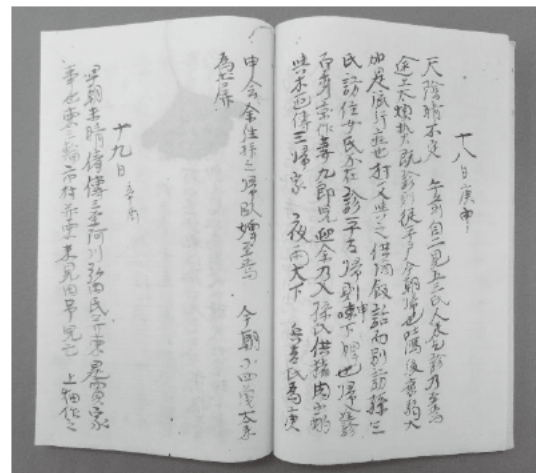


写真2 安政5年8月18日条(「古谷道庵日乗」)

午前、自二見五三氏人来乞診乃至焉、途上、太煩熱。既診、則従平戸今朝帰也。吐瀉後、衰弱大加。是流行症也。

さらに、21日には、地元の湯玉にもコレラ患者があらわれている²⁶⁾。

早朝、診湯玉才助者、美尚、与之。自昨夜吐瀉如傾而両脈絶矣。是亦近日流行虎狼痢矣。与半瀉加烏椒湯去。

26日には、「関、関・府・清末地、虎狼痢大染伝云」²⁷⁾とあり、下関の地域全体にコレラが蔓延していることがわかる。

なお、このコレラに対する民衆レベルの対応としては、9月11日条に「村人、鳴鐘鼓吹螺、大念仏来日追疫邪」²⁸⁾とあるように、祈禱、鐘鼓、法螺、念仏など宗教的な活動によりコレラ退散を願うしかなかった。医療は頼りにならず、身近で人々が次々に死んでいく。伝統的生活世界に生きる民衆は、人知を超えた力にすぎり、「疫病神=疫病」退治を図ろうとした。

ちなみに、地下の漢方医であった道庵は青年時代に蘭方医学を学んだこともあった²⁹⁾が、コレラ菌を病原体とする感染症に対してはなすすべがなかった。8月18日条に嘔吐や下痢などの胃腸症状改善作用があるとされる「半瀉加烏椒湯」を与えたという記述がみられるが、これはむしろ対症療法にすぎなかった。

最後に、「日乗」にもコレラによる死者数が、詳細に記し

である。もちろん、それは風聞・伝聞の類のものであり、厳密なものではない。9月10日条には大津周辺の死者数100余人、萩の死者数2500余人³⁰⁾と記された。萩に関しては、「萩府」と記されているその対象地域が明確ではないが、「浦日記」10月29条に記載されている死者数では、萩町は358人とあり、この数字に周辺の当島宰判106人、浜崎宰判46人を加えても510人である。概して風聞・伝聞の類の数字はオーバーになることが多いが、これはかなり誇張された数字であるように思われる。また、長州藩以外では、10月18日条に8月1日から25日までの江戸の死者数が12万1804人³¹⁾、同月22日条には長崎の死者が3万余人³²⁾と記されている。

4. おわりに

幕末、開国とともに、日本には西洋文化が大量に流入し、それは、日本の文化・文明の発展に大きく寄与した。他方、海外から入ってきたもののなかには、感染症のようなネガティブなものもあった。

安政5年、海外から日本に流入し全国に蔓延したのが、コレラだった。それは、夥しい人命を奪い、社会不安を煽った。長州藩でもコレラは猖獗を極めた。その際、「邪気」除けとして空砲を発射したり、神社での祈禱やまじないのような前近代的で非科学的な取組が見られた。とりわけ、民衆レベルでのコレラ対策はそれが限界であった。しかし、そうした神仏への祈りなどについて、今日のわれわれは、非科学的で無知蒙昧な所為として一笑に付すことはできまい。新型コロナウイルスの感染拡大に怯えその収束を願う今日のわれわれも、往々にして「神頼み的な」行動をとることがあるからである。

こうした中、果敢にコレラと闘ったのが青木周弼に代表される藩の蘭方医たちであり、彼らは先進的なオランダ医学に学び、コレラ予防として個人の衛生環境とともに公衆衛生の改善や、健康増進、生活様式の見直しなどを提言した。また、藩政府は、このような蘭方医の活動を支援する一方、地域ごとの感染死者数などの正確な把握に努め、後世に貴重な記録を残した。

人誰しも感染症にかかりたくないし、また他者に感染させたくもない。古今東西を問わず、感染症に対する人間の恐怖感やその収束を願う思いは同じである。温故知新—コレラに揺れた幕末の長州人の生き様から、コロナ禍の下にある今日のわれわれは、何を教訓として汲み取るべきであろうか。

謝 辞

本研究にあたり、史料調査・閲覧などにご高配を賜りました山口県文書館と下関市立歴史博物館、およびコレラに関する専門的知見についてご教示をいただきました本学薬学部の相良英憲准教授に深甚の謝意を表します。

注、引用・参考文献

- 1) ①ウィリアム・H・マクニール、佐々木昭夫訳：『疫病と世界史』、中公文庫、中央公論新社、2007。②立川昭二：『病気の社会史—文明に探る病因—』、岩波現代文庫、岩波書店、2007。③石弘之：『感染症の世界史 人類と病気の果てしない戦い』、洋泉社、2014などを参照。
- 2) 前掲注1)③『感染症の世界史』磯田道史：『感染症の日本史』、文春新書、文芸春秋社、2020などを参照。
- 3) 2000年以降、地方史研究の進展のなかで、日本各地のコレラ関連史料の掘り起こしが進み、幕末におけるコレラ流行は地域の疫病史として紹介されることが増えてきた。駿州大宮町において造酒屋を営んだ栢谷弥兵衛が記した「袖日記」を基にした鈴木則子：『安政5年コレラ流行をめぐる〈疫病経験〉』、『歴史学研究』第1011号、績文堂出版、2021、12-25は、この最新研究の一例である。
- 4) ドイツの細菌学者ロベルト・コッホがコレラ菌を発見し、病原菌が判明したのは、明治17年(1884)のことであった。田中助一：『防長医学史(全)』、聚海書林、1984、上巻161。
- 5) 『最新医学全書2』、小学館、1990、452-453。
- 6) 前掲注1)②『病気の社会史』、191。
- 7) 前掲注4)『防長医学史(全)』、上巻151-155。
- 8) ポンペ・ファン・メールデルフォールト、沼田次郎・荒瀬進訳：『ポンペ日本滞在見聞記—日本における5年間—』、雄松堂出版、1968、288。
- 9) 奥武則：『感染症と民衆 明治日本のコレラ体験』、平凡社新書、平凡社、2020、28-30。
- 10) 前掲注4)『防長医学史(全)』、上巻159-163。
- 11) 毛利家文庫71藩臣日記2、山口県文書館蔵。なお、山口県編：『山口県史 史料編 幕末維新3』、山口県、2007は、本史料全62冊のうち幕末の激変期に記された5冊を翻刻し収録している。
- 12) 『浦日記』48巻、安政5年8月16日条。
- 13) 同上、8月27日条には、「地町流行病にて死人多く有之由ニ付、付立いたし差出候様沙汰相成候事」と記されている。
- 14) 同上、8月29日条。
- 15) 前掲注4)『防長医学史(全)』、上巻157。

- 16) 前掲注12)浦日記,8月晦日条.
- 17) 天保11年(1840)9月、藩医の能美洞庵らにより創設された。初め医学所、濟生堂また好生堂と称していたが、嘉永3年(1850)6月、好生館と改称された。時山弥八:増補訂正 もりのしげり,赤間関書房,1969,176.
- 18) 前掲注12)浦日記,8月29日条.また、山口県文書館蔵の河崎家文書2092にはコレラの「予防法」に係る文書があり、浦日記と同文が記されている。なお、安政6年2月4日、萩の獄中にあった吉田松陰は、当該年度におけるコレラの感染拡大を警戒し、この「予防法」を再頒布するよう提案した。松陰から杉梅太郎宛書簡,山口県教育会編:吉田松陰全集第6巻,岩波書店,1935,214-215.ちなみに、この書簡の原本が2020年に萩博物館で初公開され話題になった。これについては、道迫真吾:幕末のコレラ大流行と吉田松陰が説く予防法,山口県地方史研究第124号,山口県地方史学会,2020,107-111を参照。
- 19) 同上,8月29日条.
- 20) 同上,10月29日条.
- 21) 下関市立歴史博物館蔵。なお、山口県編:山口県史料編 幕末維新7,山口県,2014は、漢文体で記されている本史料を、難読漢字にはルビをふるとともに読み下し文にして抄録している。また、豊浦町史編纂委員会編:豊浦町史3[民俗編],豊浦町,1995,22-541は、本史料中の民俗記事を抽出し要約している。ちなみに、本史料に基づき、安政5・6年における長州藩のコレラ流行を分析したのが、三宅紹宣:幕末維新の政治過程,吉川弘文館,2021,111-113である。
- 22) 古谷道庵日乗56巻,安政5年8月16日条.
- 23) 1857年から1862年までの5年間、オランダ海軍の軍医として長崎に滞在したボンペも、「たくさんの犠牲者が出た。市民はこのような病気に見舞われてまったく意気消沈した。彼らは、この原因は日本を外国に開放したからだといって、市民のわれわれ外国人に対する考えはときには、はなはだわれわれを敵視するようにさえなった」と述べている。前掲注8)ボンペ日本滞在看聞記,288.
- 24) 前掲注22)日乗,8月17日条.
- 25) 同上,8月18日条.
- 26) 同上,8月21日条.
- 27) 同上,8月26日条.
- 28) 同上,9月11日条.
- 29) 道庵は、26歳の時に江戸に赴き、伊藤玄朴・戸塚静海と共に、三大蘭方医家として高名であった坪井信道の日習塾で医学を学んだ。前掲幕末維新7,6.日本歴史学会編:明治維新人名辞典,吉川弘文館,1981,637-638.
- 30) 前掲注22)日乗,9月10日条.
- 31) 日乗57巻,10月18日条.
- 32) 同上,10月22日条.